

今年の聞き納めは ほっこり温まる江戸の人情噺を。

落語家 柳家 三三三

やなぎや

さんざ



【プロフィール】1974年神奈川県出身。93年3月、高校卒業と同時に柳家小三治に入門。同年5月、楽屋入りし前座名「小多け」となる。96年、二ツ目昇進と同時に「三三」に改名。06年に真打昇進。キレのある語り口は落語通も唸らせ、高い話術が必要な人情噺などで真価を発揮する。

幼い頃から大好きだった落語の世界に飛び込み、噺家となって二十余年。今では「若き古典落語の名手」と称される柳家三三さん。全国各地の高座を飛び回る一方で、映画の落語指導やコミックスの落語監修も務めるなど、多岐にわたって活躍中です。子育て世代には、NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」のアニメ「パンツぱんくろう」のせんたこはっちゃん役と言えればお馴染みでしょう。取材の日は長距離移動後の高座前でしたが、疲れた顔一つ見せず飄々とした語り口で、久留米公演への想いを語ってくれました。

●演目は、年末にぴったりの『**ぶんしちもつとい**』です。

ちよつとドラマチックですし、後味の良い人情噺なので暮れの聞き納めにふさわしいかなと。「ああ、良かったね」と気持ち良くお帰りいただけだと思います。

●登場人物が多いので、**演じ分けも大変**そうです。

それぞれの役になりきらないとらしく聞こえないし、一人にのめり込んでもダメ。例えるなら、私が多重人格だとして、分裂した人格が一人の役を100%ずつで演じて、それをまとめて演出家をする人格もいて、タイムキーパーもいて、それぞれ各自の役割を果たしていると言ったらわかりやすいでしょうか。自分の中で、シーンごとに出てくる人格がいるんです。

●演じる上で気をつけていることは？

落語はストーリーが決まっているので、噺家が思い描いている映像をそのままに話すだけ。ただ、どんな風に話すのかというサジ加減は、お客様の反応とか雰囲気引つ張り出してもらおうという感じですね。笑わせるんだ、楽しませるんだ、と自分が操るのではなく、お客様に導かれて次の言葉が出てくるという感覚を信じています。私は子どもの頃から落語が大好きで、幸いにも今は噺家になって高座に上がることで暮らせています。そんな恵まれた環境にいますから、上がった先々の高座で、いろんな状況を含めて楽しみたいですね。

●2年連続の久留米公演です。

久留米で話したのは昨年初めてですが、「よく来たね」と温かく迎えてもらったのを覚えています。久留米座の和の空間は、落語するのにすごくしっくりくるんですよ。雰囲気が出来上がりやすい環境とも言えます。雰囲気が出てくるといい思い出だけを頼りに伺います(笑)。久留米のお客様と一緒に楽しい時間が持てると思います。



(取材・編集/まちプラ編集室)

《チケット好評発売中!!》 江戸落語柳家三三独演会「三三の冬噺。」

12月21日(木) 14:00開演 (13:30開場)

【会場】久留米シティプラザ 久留米座

【出演】柳家三三、柳家わさび

【チケット】全席指定 一般/3,000円

高校生以下/1,000円

【主催】久留米シティプラザ(久留米市)

TEL. 0942-36-3000(代表) FAX. 0942-36-3087



柳家三三師匠

落語の手ほどき 一、二、三、ゴ?

いら、さん、ざ?



江戸落語の魅力とは?

大阪(上方)の落語はもともと野外で行っていたので、道行く人の足を止めるための鳴りものや呼び込みが必要だったんですね。でも、東京(江戸落語)は部屋に人を集めて噺を聴いてもらっていたのが始まり。派手さや華やかさが必要なかったぶん、よりシンプルです。大阪に比べると地味だけど、お客様の想像する余地が多いので自由に映像を思い浮かべて楽しんでいただけたらと思います。



古典落語ってなあに?

今回の演目『文七元結』は、もとは三遊亭圓朝(1839-1900※)が創ったと言われていますが、今でもたくさんの演じ手があります。噺家としても面白いしやりがいがあるし、お客様も聞き応えがある。魅力がある噺だからこそ長く演じられているんだと思います。なので私は古典とか新作とか、特に分けて考えてないですよ。

※三遊亭圓朝(1839-1900)～江戸時代末期～明治に活躍した落語家。中興落語の祖ともいわれる江戸・東京落語の大名跡。



『文七元結』あらすじ
左官の長兵衛は、腕は立つのに大の博打好き。年の瀬も押し迫ったある日、借金がかさんで年も越せない様子の長兵衛を見かねて、娘のお久が姿を消してしまい…



人情^{ばなし}噺ってなあに?

実は、『人情噺』＝涙あり笑いありの感動する物語ということではありません。笑いを基本にしたストーリーの展開で噺を進めて、最後に“落ち”がつくのが『落とし噺』。これに対し、笑いありきではなく「世間にこんな話がありましたよ」って噺で“落ち”がないのが『人情噺』なんです。世の中の出来事を、物語の展開だったり会話の妙であったりお客様に興味を持っていただくのですが、ちょっとドラマチックなので感動物語と思われるのかもしれません。



落語の楽しみ方を教えて!



まずは会場に来て、なんとなく聞きながら楽しんでいただいて、帰りに全部忘れて帰るくらいが胃にもたれない感じでいいかなと(笑)。そうしたら、同じ噺で何回も楽しめるでしょう? 同じ噺でも演者の個性がありますし、想像するお客様もその時の年齢や経験で見える絵や印象が変わるはず。聞くごとに面白ってというのが落語の魅力なんじゃないでしょうか。私は毎回「落語を聞きに来てくれるお客様は最高だな」と思っていますし、その日、その空間、その日暮らしな感じで、お客様と一緒に楽しい空間にしたいですね。